

『水循環シンポジウム2021 水循環 ×気候変動』 開催報告

水循環・まちづくり・防災グループ 研究員 澤田 みつ子

令和3年12月6日にオンライン配信にて、「水循環 ×気候変動」をテーマに「水循環シンポジウム2021（主催：内閣官房水循環政策本部事務局、運営事務局：リバーフロント研究所）」が開催されました。本シンポジウムは、流域マネジメントの更なる推進に向けて開催されているものです。感染症対策のため初のWeb会議形式の開催となり、昨年度の動画配信による開催と合わせて2年連続でオンラインでの開催となりました。

地球温暖化による気候変動は、人間の生活や自然の生態系に様々な影響を与えており、水循環への影響も懸念されています。本シンポジウムでは、気候変動を踏まえた流域水循環を考えるとともに、地球温暖化対策に寄与する「2050年カーボンニュートラル」の実現に向けて普及が必要な「水循環政策における水力発電の導入」のポイントについて紹介しました。

水循環シンポジウム2021 水循環 ×気候変動

日時：令和3年12月6日（月） 13:30～15:00
場所：総務省 三田共用会議所 講堂からオンライン配信
（参加者：210人）

プログラム（敬称略）

開会挨拶：三橋さゆり

（内閣官房水循環政策本部事務局 事務局長）

講演：「気候変動による水循環への影響

－見えない淡水資源・地下水を中心に－

辻村 真貴（筑波大学生命環境系教授）

講演：「小水力発電と水循環

－持続性について考える－

中島 大（全国小水力利用推進協議会事務局長）

質疑応答・まとめ

閉会挨拶：三橋さゆり（同上）



写真 会場風景

【発表概要】

●辻村真貴 教授（筑波大学）

- ・気候変動により大雨、干ばつ等、極端な現象の頻度が増加することが報告されているが、地球最大の液体淡水資源である地下水への、気候変動の影響については未解明な部分が多い。
- ・短時間大雨頻度の増加により、地下水涵養量が減少する可能性がある。こうした現象への適応策の一つとして、地下水の人工涵養が考えられる。半乾燥地域では、地表水と地下水の連続性を利用し、貯水池からの漏水により地下水涵養を促進している事例がある。
- ・流域水マネジメントを実現するためには、既存の優良事例を参考にしつつ、地域の実状に即して、できることから少しずつ始めることが重要である。

●中島大 事務局長（全国小水力利用推進協議会）

- ・小水力発電を普及させる方法として、地元の企業・地域の関係者に、小水力発電事業に関心を持ってもらい、事業への参画を促すことが重要である。
- ・継続的な取り組みが求められる地球温暖化対策を進めるためには、水力発電事業も長期的に継続させることが必要である。
- ・小水力発電事業の継続には、将来を見越した施設維持の取組が必要である。発電所の廃止に備え撤去費用を積み立てるよりも、継続性を考慮した施設の維持方法を検討することが重要である。

参加者内訳（申込み時）	人数	%
国（農水省、環境省、国交省、他）	37	15.3
地方公共団体	120	49.6
独立行政法人	4	1.7
法人（企業、他）※	50	20.7
団体（社団・財団含む）	23	9.5
個人・不明	8	3.3
総計	242	100.0

表 参加者内訳（事前申込み時）
（※法人は、マスコミ1件を含む）